はたして「湿原の忍者」は浸透したのか？

貞國　利夫*

2021年の夏、当館は企画展「湿原の忍者 SHINOBI BIRD ～こっそり暮らすクイナたち～」を実施しました。

博物館では、これまで湿原に棲むクイナの仲間を調査してきました。それらの調査成果を市民の皆さんへ知って頂きつつ、釧路湿原はタンチョウのみならず様々な野鳥が生息し、成り立っていることを伝えたいという思いから企画しました。2016年にも、「知られざる釧路湿原」と題した企画展の中でクイナについては触れていましたが（釧路市立博物館々報No.418 p3-8参照）、今回はクイナのみで展示をつくりました。全国的にみても、クイナに特化した企画展というのはかなり珍しいと思われます。その理由として、「国内では、クイナたちが好む湿地が残されている場所が少ない。普段から姿を現すことが少なく、他の鳥類に比べて生態が不明で紹介しづらい。」などいくつか考えられます。幸い釧路は湿原が豊富にあり、クイナ類の生息データがある程度揃っていたために実施することができました。

ここでは、彼らの生態の説明ではなく、本展示でどうやってクイナたちを認知してもらえるよう工夫したか、その取り組みについて紹介します。

まず一番大事といっても良い広報活動ですが、最初はHPやSNS、ポスターなどによって周知を始めました。展示タイトルはクイナの生態をあらわす「湿原の忍者」と銘打って、興味を惹けるよう工夫してみました。また機運を高めるべく、新聞の中で釧路のクイナたちの暮らしぶりを紹介する短期連載を行いました。他にも、展示期間中に地元ラジオ局にて、クイナの生態解説を交えた展示の紹介もしました。これらによって、一定の周知はできたと思われます。

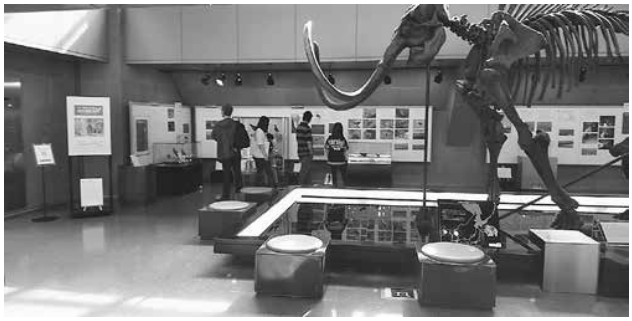

図１．会場の様子

展示ではクイナやその仲間をデフォルメしたイメージキャラクターを作成し、たびたび登場してもらいました。図や写真でわかりやすく彼らの暮らしぶりを紹介しているつもりですが、やはり文章のみで説明しなくてはならない所がでてきます。そういったところで、キャラクターと一緒に説明したことで、少し印象が柔らかくなって理解していただきやすくなったのではと考えています。

図２．クイナのキャラクターがチラシへ

また、そのキャラクターを利用して友の会でオリジナル缶バッチを製作、販売していただきました。缶バッチは特に子どもに人気で、広い年齢層へ展示に興味を持ち知っていただく上で、グッズは非常に良いツールだと思っています。

図３．作成したクイナ缶バッチ

展示では、なるべくわかりやすい文章を意識しつつ、ところどころにクイズを織り交ぜました。クイズに全て参加すると、記念のクイナカードを景品としてプレゼントしました。子どもはもちろんのこと、意外に大人も楽しく参加していたようで、展示への理解につながったのではないかと思います。他にも、クイナたちの鳴き声を会場で流しました。来場者は、クイナには実に多くの鳴き声があることに驚いていたようでした。また、調査や協力者によって撮

＊釧路市立博物館

影されたクイナの映像、実際にどのような環境で調査を行なっているかの様子を写した映像なども展示しました。

関連行事は３つ企画しました。１つは観察会です。といっても、クイナはヨシ原の中に潜んでおり、人目につくような場所にはなかなか出てきません。観察会時でも姿を見ることはできないかと思い、「クイナの声に耳を傾ける会」と題しました。そのタイトルが良かったのかどうかは分かりませんが、30名近くの参加者が集まりました。事前にクイナの生態と鳴き声に関するレクチャーを行い、湿原の中でもクイナが好む場所とそうでない場所の違いなど、実際に現地で環境をみながら解説を行いました。そして、夏の湿原の夕暮れどき、参加者はクイナが鳴くのを静かに待っていました。結果として、観察会中にクイナは鳴いてくれなかったのですが、通常の探鳥会とはまた違った内容で、新鮮な印象を受けられたように思います。

図４．静かに鳥の声へ耳を傾ける参加者

２つ目は体験講座で、「はじめての羽標本づくり」と題して小中学生対象に行いました。これは定員を大きく超える応募があり、関心の高さが伺えました。参加者には、実際に羽に触れながら、羽や翼の部位の役割などについて知っていただきました。羽は飛んだり体を保温したりする機能以外にも、自分の体を支えたり羽で音を出す機能があるなど、子どもたちは興味深そうに聞いていました。

図５．熱心に鳥の羽を並べる子どもたち

最後は講演会です。国内で初めての鳥類専門の研究機関である、山階鳥類研究所の岩見氏に講演いただきました。コロナウイルス感染防止のため、一度講演が延期になってしまいましたが、情勢をみてなんとか開催することができました。岩見氏は鳥類標本製作のプロフェッショナルです。クイナ類の機能的な視点から、その秀でた能力について講演いただきました。特に、クイナの近縁種であるヤンバルクイナとの比較の話では、聴講者も興味深そうに聞き入り、講演後の質問は非常に活発になされていたのが印象的でした。

図６．活発な質疑応答がなされた講演

さて、このように様々な取り組みを行なってきた本展示でしたが、皆さんにどれほどクイナのことを認識していただけたのでしょうか。コロナの感染防止の観点から、アンケートの実施については控えたこともあり、ハッキリとした結果は分かりません。ですが、来場者からは「クイナが釧路にいるなんて知らなかった」「こんな貴重な鳥が釧路湿原に生息しているのを知れて良かった」という感想や、関連行事の参加者数などをみると、一定の認知はしていただいたように思います。ですが、「湿原の忍者＝クイナ」という認識にはまだ至っていないでしょう。

クイナの調査は今後も続いていきます。本展示に留まらず、調査成果の公表や講座などを継続的に行なっていきたいと思います。そしていつの日か、市民の多くの方が「釧路の湿原にはクイナという忍者の鳥がいる」という認識を持つことを願っています。